椿說弓張月

前編

四

へ13
3908
4

阿へ13
號3908
卷4

鎮西八郎為朝外傳　椿説弓張月前篇卷之四

東都　曲亭主人編次

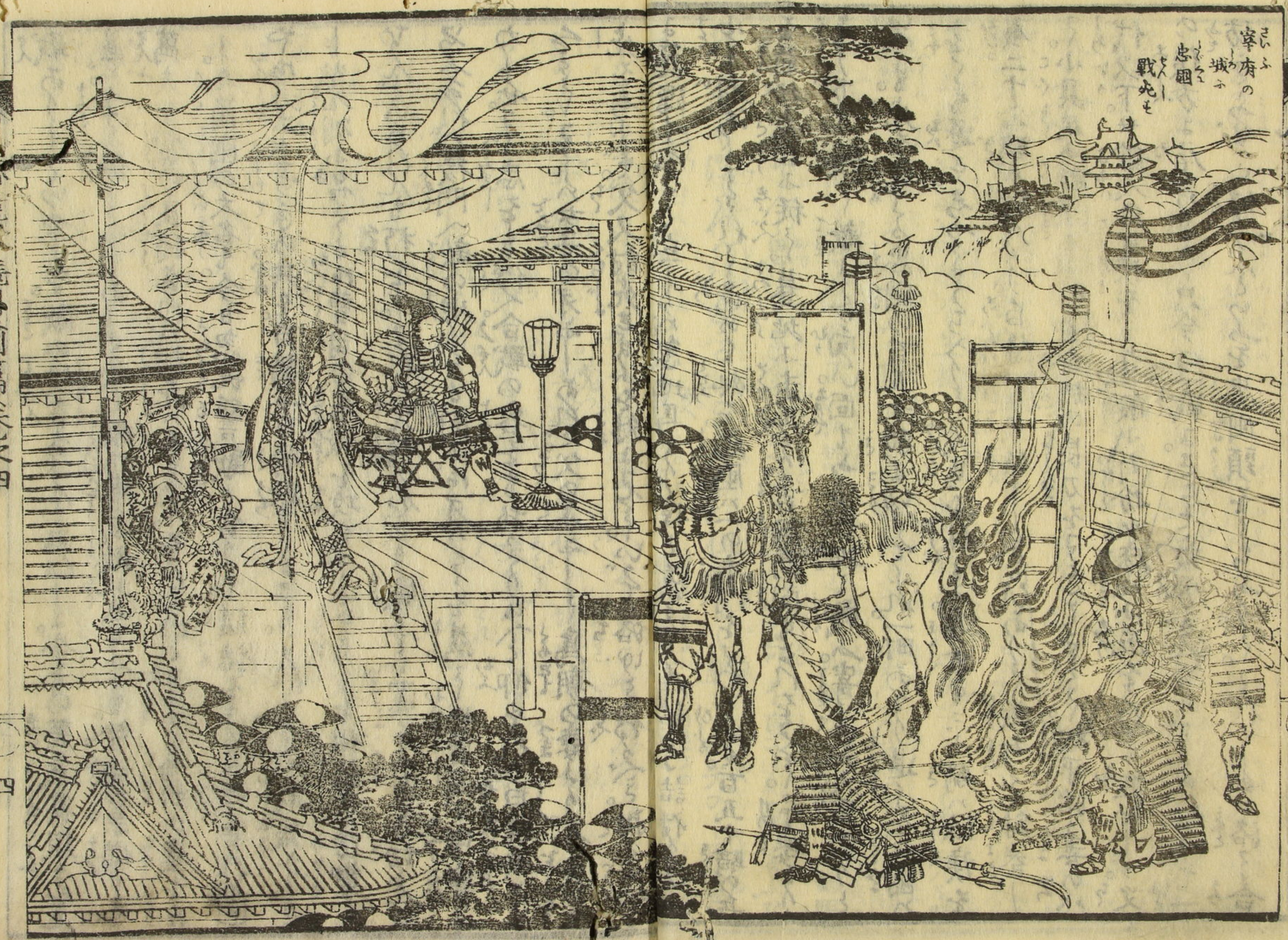
第九回

野風陣没〻〻活路を開
八代殿戦〻〻飛矢に當

宮軍は新院をそゝのかしまゐらす。討ぢ〻る宗徒の武士を召捕るゝ〻〻軍兵処〻に部〻〻。隈なく索まわらせたり。當下公御僉議あるに。為朝猶西國へ逃げ〻〻ふたゝび事を起さば。いかさま大ゐに速に彼が妻子を生拘て進ずべきよし。遥馬をもて。菊池原田が許へ仰つかはさる。太宰府は遥るかに洛を合戦あり〻いまだ決せず。忠國白縫はさふも。士卒こゝかゝべ〻もそひよふねば。去年より只そゝきの天のこゝろ瞻るゆゑ。伍曹司のえりすぐりの。雲立や音耗のあり〻〻。まつとまる極ゐ保元元年七月

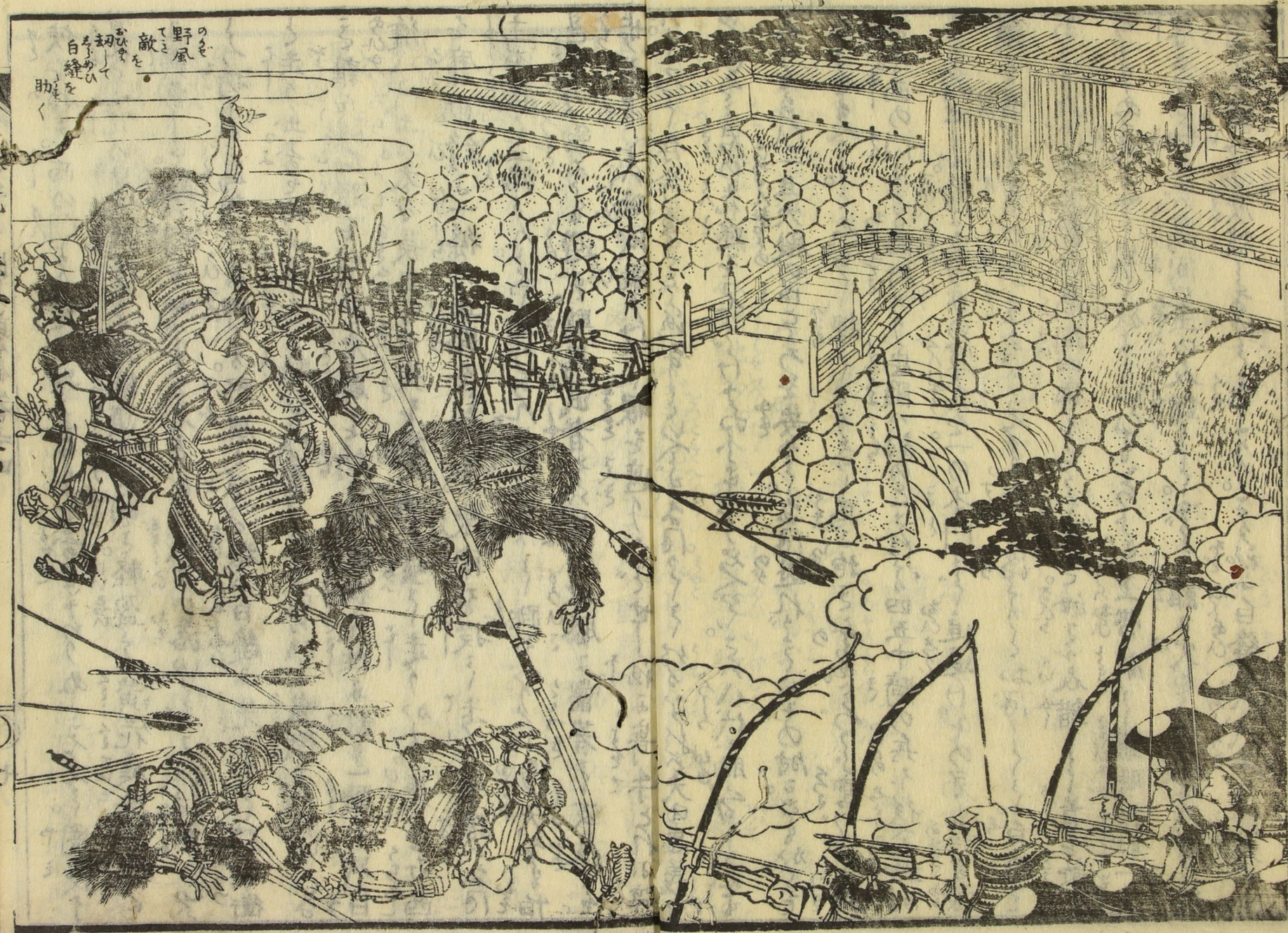
九三日の夜間ろろ。俄頃よ恩劇うれば。忠國あ中ここく。ゑより卧房を起
生。遠侍すぐ。ひろ〳〵うる時宗徒の家隷吉田兵衛高間四郎。連忙〳〵走り
来れり。忠國ろ〳〵。あるがまや。あまこの何ものぞと問へ両人荅へ。實ゆ〳〵洛ゆ
鳥羽法皇崩御の折しも新院ゆ謀反のゆえありて。いぬる十一日の朝よ
ぐ記よ合戦ぐだり。その日の中ゆ新院うち負ひ〳〵ぞ。ろろよ下野守
殿義朝をいふ内裏へ召れ判官殿爲義をいふ八郎殿爲朝を。をぐぐめ六人の子息を將
ろ〳〵院の御身方ゆ参ひ〳〵ゆ軍敗ひ〳〵後ゆ父子兄弟ここる四落八落
ゆなりぬ。その生死をもぐぞ。さろ〳〵菊池原田ゆ徒勅命をさし
てここ年来の鬱懐を散ん為。只今押寄まるしてこる騒動はうろ
ゆふ。この〳〵誰がゆの定〳〵といふもあ〳〵ねど。いとあばつるなれば。ろ〳〵ま
ゆふ。ろろ〳〵といふ。忠國はろ〳〵眉を顰時もあるべきよ。一院鳥羽山朋御ゆ
御歎の容色ハなく。却て新院と主上の御位をあらそひ給ふ。
ことーかぐで。されども菊池原田ゆ押寄まるしてこる虚説もあ〳〵じ為朝
久〳〵洛よ在〳〵。宗徒の郎ゆも御ゆ彼地よあり。今この間を窺ハ彼
徒ゆ〳〵流言〳〵。却〳〵直よ攻落さんとぞろよやあ〳〵。合戦の用意を
せよと仰せるゆ〳〵。忽地彼此よ喊声發り。鬨ゆ響き〳〵。吉田高間ハ
これを聞といへども。敢騒ぐ。さてハ風声聚〳〵て敵も間じ〳〵寄ろと
ぼ〳〵。それゆ〳〵ゆ防ぎ向〳〵防ぎ〳〵。ゆ〳〵ゆ。ゆ〳〵ゆ。物具めるべしといひつて。
飛ぐ〳〵ゆ退出り。當下忠國ハ白縫をぬ〳〵ろ〳〵ぞ。ろ〳〵ぞ。告ろ。ゆ鎧
一縮〳〵出ふ。か〳〵〳〵。吉田高間の両人ハ正門の望楼よ登り〳〵敵陣ろ
對ひ一院崩御の時よ當て。私ゆ干戈を動さんと欲ろハゆの人ぞ。その名を
ぜんと呼ろ。時ゆ寄ゆの陣より。卯花威の鎧よ星白の兜を戴て佐

目なる馬に乗り、裾縅目の鎧に高角打ちたる兜を戴き、鹿毛なる馬に乗
りたる武者二騎、篝火の光に馬をそばめ、洛に入る。新院の御謀反發
覚、汝が主君なるべき為朝も、院の御所にぞ有らんずらんと、十日の一戦
に、足もなく打負て、生死も知らずぞ有りける。かくいふは菊池原田が股肱
腹心の家隷に王名太郎宇土平三郎といふ者。主俄頃に宣旨を蒙
て、為朝が氏族親族を生拘て進ぜん為發向せり。こうも伏城を脱
て、縛を受よとぞ回答る。高間四郎驀然として笑ひ、九箇國を管領
す。武勇海内に聞る。御曹司の住館に夜討せんに、光神に誘引てる山賊野
伏の所為なんと思ひしに、案に違て、勅命を稟て向ふなれ
ば、夜も深ければ待べき物にこそあれ。但鏃よく釣たる征矢の用意に
て、受よとぞ引標と發て矢を番へ、敵とぞ引標と發て矢を番へ、
よ篠深くぐさと立てぞ。忽地馬より撞と落てぞ差詰引詰射る程に、
少し射ては、ずさりて色めく処を、忠國は一の木戸を、ずと開て、
前後左右に従て、驀地に走出ぬ。吉田高間も、これを、
走り下り。續て敵まん向ひ面もあるぞ挑み戦ふ。寄せ合ひ大軍ありと
いへども、死を究たる忠國の百五十騎に切て懸り、一町あまり退くを、忠國は
主を、くも逐ぬ。ちづるうち入り、人馬を休るに、身方も三十騎は深手を
負て、二十三騎は討れぬ。白縫は日来雄々しきひあり、鉄打たる鉢巻
に、小具足に肚巻、かの白柄の長刀を、ちとさしてぞ、紀平治が妻の八
代以下、廿餘人の女房をぞ、一般に打扮せ、床几に尻をかけて、在せしが、
の後方に居たりて、只今の一戦に、さこそ疲労のしけめ。ゆかりて一
防ぎ、ふせぎ、仕ったりとて、忠國頭をぞ、ちぶりて、これぞ洛に合


宰府の城に忠国戰死せ

戦ありしといひけるを。敵の流言なりんと思ひしに。今その英氣甚鋭きを見
ては。今こく偽りもあらざるべし。縦ひ曹司敗北なすとも。智勇兼備りく
萬夫不當の良將なれバ。討死ハなさらじ。さりハあれど日来ハ馬前の塵を払
ひ。九箇國の大名も。今日忽地讎敵となりて。後詰をなさん便なけれバ。
やゝ一万五千の兵を百騎二百騎撃とるとも。それに手ら敢益なしさ
しも九州に名たる御曹司の居城を攻らるゝに。女ぞらなる相語らひ。防禦し
なんどいかでんも朽をし。されハ矢種のかぎり戦ふて。潔く肚かき切んと
そふなれバ。後門へ敵の廻らざる間に。御身ハこゝを落られ。曹司に環會ま
かせよ。其志をも告くれよと仰られバ。白縫涙さし
くみて。それハ女子の身にしあれど。父の子なり。爲朝の妻なり。今夫の生
死をもしらで。父又討死をするを外にみて。いかで落ゆき侍るべき。殊更幼き
より母に後れまゐらせ。父の慈愛にそだてられバ。せめて孝行ハ竭さんと思ふも
せめてハ死出の御道すがら。三途の川の瀬をも埋りて渡りて分くべし
ふ身をまもりなくも落よ活よと仰するハ。味氣なき世に存命て。憂名を見
よとや。おぼさるん父の仰へそむくとも。辭がたき是の誡け引かへて
いふ恩愛の切なるハ。今この一句にあらはれて。勇きこゝろもよわりゆく忠國
も顔うち背向。死んといふハ子たるの誠。助んとするハ父の慈悲なり。そも天
地に孕まれて。この世に生を稟るもの。子をおもひ親を慕ふハ。天とぶ鳥
地を走る獣も。異なるものなければこそ。桓山の四鳥もその別離を
悲まれ。況てや子といふものハ。只是御身のみなれバ。げに年浪のよるべ
獣。其に。あらき風にも當じと。養育成長に及で。過世に縁をし締ん。
思ひもよらで源家の御曹司を聟とし。望足りぬと思ひしも。成者

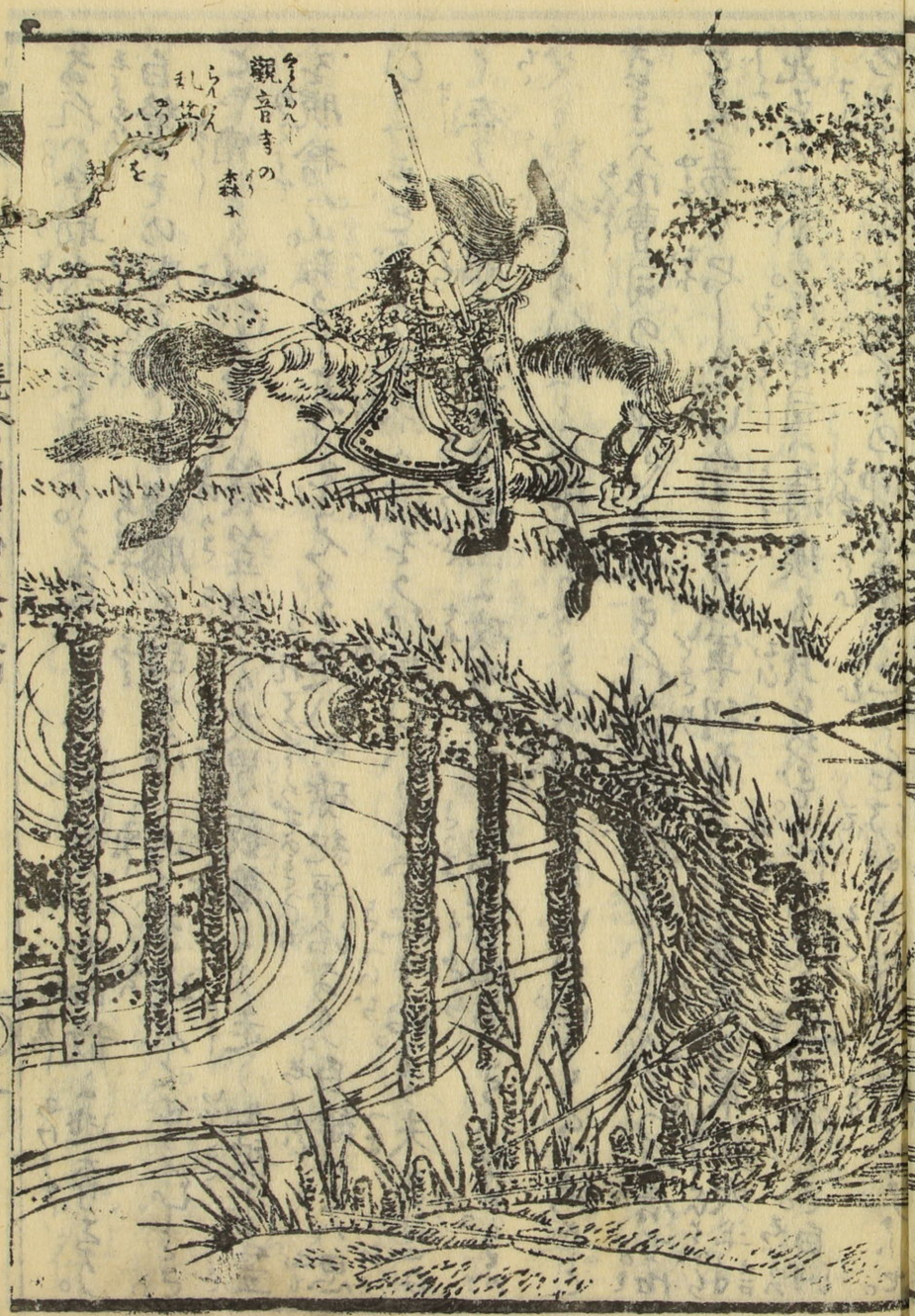
必衰の理を脱まぬこそ。この大軍を引受て屍を戦場に曝さんは武者の常なれ。敢悔べきにあらず。さるをおのれ辨まで父が命を悖るは大なる孝にあらず。親子の元是一世の縁なり。養の恩をおもひて脱まぬかさき死を脱まぬ。父が亡魂をも吊んとおもはばいとゆゆしき懲を浩処に矢叫の関の声耳ならぬ。ゆえに。高間四郎が鎧に立矢を夥おひ。黒皮威も流く鮮血に紅威と染なせ。大床ちかく走りあるに敵は既に二の木門まで攻入りぬ。吉田兵衛も討まさむとひしめきそれぞれ防矢つくろふその間あとく生害あらんといひけれ。又敵軍に走む人は阿曾忠國荒介ぞ。いざさらば最期の一戦にとうよく腹をきわかんその馬奇せよと焦燥く様こうり肉りと打嚙ま綱に操馳出る。父は續く白縫も駈向とする神とりあ。八代諫めて曰ふ夫紀平治も洛あく討死せんとこそ思ふ。存命をさこそ思ふ。夫の忠義をいとひて君の先途をえらぶけるあるとも。さは八代が胸にさもとそもひ一旦大殿の出ところを安めて。あはれ逃れぐるいその附まともかくをあるとせまえ。と忠ぶ諫めるに馬に抱きそのあとに曹づをうけ向く西の門より落行りぬ。忠國は討のとされる四五十騎の兵を後に血戦附をうけ世。終は寄手の軍兵を一の木門まで追退けぬ。その矛も折多深で痍を負て。舊の処へ立ぬ。既に落ぬ。白縫も附ぬ。あはれ。あく舌び。高間四郎をちかく招き汝こそ父錯に首を敵ふ。とうとうぬ鳥。火を放よといひもをはるとぞ。上帯解て鎧脱捨肚一文字ようさ切まぶ。高間は主の父錯に。館に火をうけつ。その矛も煙の中ふ死ぬ。灰燼となりぬ。亡よりぬ。極ふ白縫は八代ふ九餘人の女

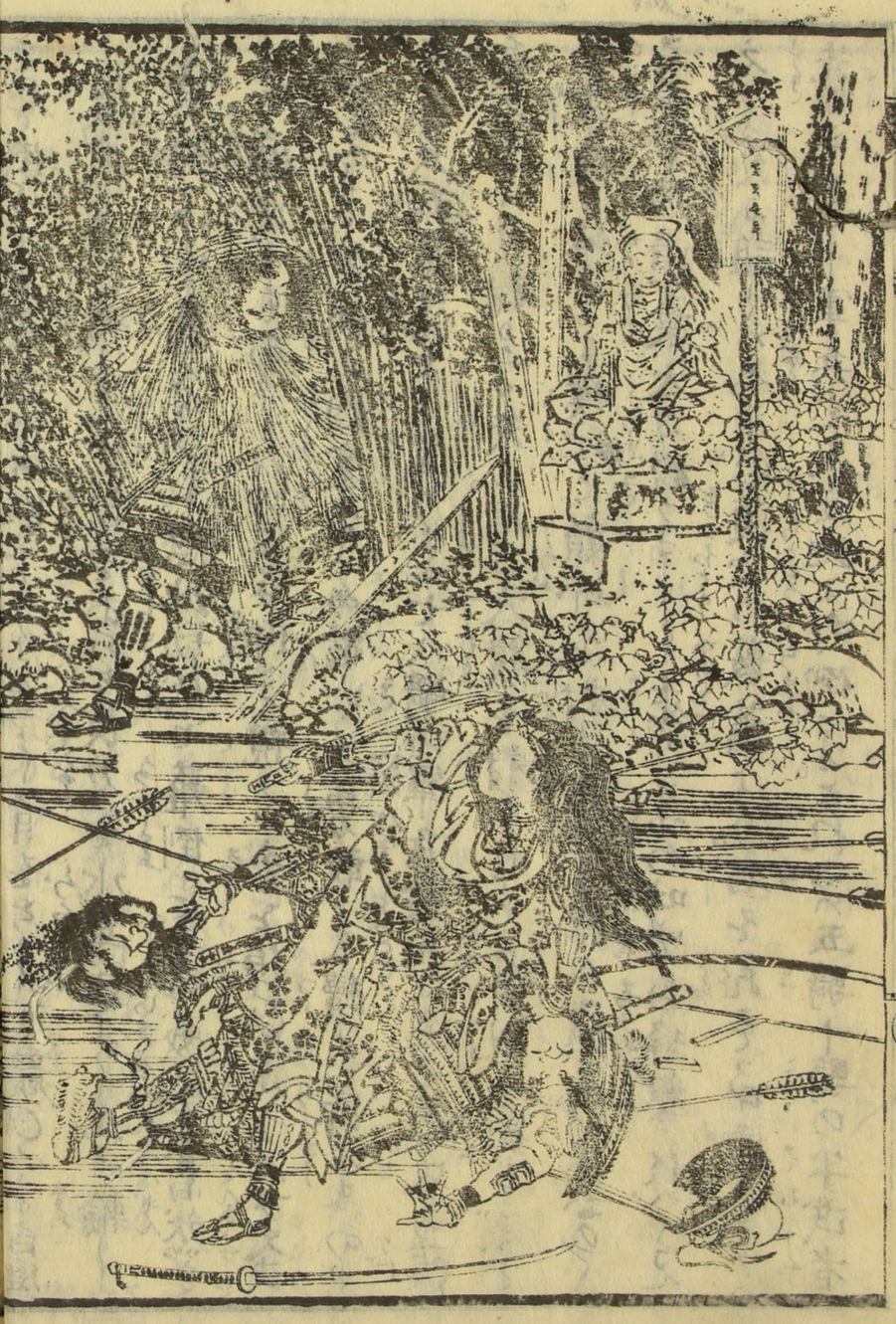

野風
敵を
刻して
白縫を
助く

使を遣る。西の門より走り出ずるも、まだまだ夜深く、闇夜なれば、晃々たる星の光に、白梅頭上に開き、軽盈たる黄花庭除を照らすも異なるなし。敵は門を破りて城兵に落ち、ぐるぐるに討ち囲まれ、ひしひしと折れ、鳥朝の畜生、野風に吹かるる狼は白縫に先だち、ひょう衝と走り出でぬ。軍兵は駈むるに、當るを幸いに噬倒し、いびきを雑兵は向脛を咬まれ、肩膝を折られ、右往左往に乱れ騒ぐ。白猪八代は太刀長刀の刀尖を揃へ、咄と嘘と走り掛かり、東を西を靡け、終に一條の血路を辿りて、東南を投げ走りける。狼は主を輙く落さんとや思ひけん、丸も去らじと跳ね廻り、弓矢をも怕まで、刀劍をも避けず、騎馬武者をば馬の双膝に齧着く反落せば、歩武者をば砂に跳ね倒す。眼を磨りて見れば、只遠矢に射られたれば、野風猛しといえども、矛も又鐵石の如くなれば、立ところの矢は餘條に及び、大に嗟くこと一声、終に立ち結ぶ。嗚呼奇なるかな、嗚呼痛しかな、猛獣の人に押し、一言の恩を感じ、両頭志を尽くし、身を喪しても主の必死を救ふ。人間にもあるは稀なり。有ることかは、一動止まりこの戦果て、後寄せの大将菊池肥後守野風なるものを伐ぬ。ぬ。感激に堪へず、士卒彼狼が忠心に類まれなるを感じ、その皮を陣太鼓に張り、家の重器とぞ、建武の年間、寂阿武重が時に至るまで、これを相傳へ、数度の武功を顕はしぬ。人間話休題。白縫は中一方を切脱して、夥の女使に押隔られ、八代に従ひ、ぐるぐるに身を隠すこと、頃も九三日の陰魄も山挾に昇れども、天結陰霞蕭

蕭と蹴出し〳〵ゆく路のいと暗きよ。武者十騎あまり。篝火をあり照
しつゝ。一烟走よ追蒐り。白縫ハ且戦ひ且走り。又五七町落伸るこゝ
ろ。ハ代も後ヒめるとおぼしくて。ぼくぼくと回答もせずこゝ打ち
彼を撃せ〳〵これのこ活んやうと云ふりとち。馬の頸を引入せ。只今
城ゑ火を放〳〵こゝ〳〵。忽地西よ當り〳〵火光天よ衝き。焔こと
〳〵燃揚るぞ。白縫潸然と涙を流し。已るん〳〵。父も討ぬ。ハ代
もぞ北ぞ附至れり。勢よ落伸〳〵。ちぐ〳〵も後ヒきわふせし
こそ胸なれ。ちゝハ最期を急んぬ〳〵。城の火光を燭とし。舊れ
路へ馳〳〵ゆく。とのハ代ハ白縫を落さん爲。潛み引下り〳〵。ふて
び逐ひ来る敵を拒ぎ。二騎よ疾負せ。二騎を切倒し。首を取り立
あぐる折しも。矢一ツ来りしハ代が冠のあり〳〵下と立ぶ。ちぐ〳〵も

倒〳〵を軍兵四五騎下り〳〵ちぐ〳〵。首をとらんと競ひ〳〵。白縫
を立入り〳〵。遥よ〳〵鎧をあらを。長刀を水車のごとくふり輪〳〵
〳〵五騎が中よ蒐入り〳〵。忽地切伏せ薙倒さ。その威勢奮然と
して當ぶ〳〵もあ〳〵れハ。ま仰ぎ視〳〵舌を掉ひ足ふん女丈夫
〳〵ふ〳〵る。爲朝の内室ぞ〳〵。彼ぶ〳〵ふ勇敢〳〵も續く郎ぞ〳〵
ざ〳〵よ。只射〳〵落を〳〵罵り〳〵。七八騎の軍兵彼此よ立ぶれ。木の蔭
岳の上より射〳〵る矢よ馬ハ太腹を射せ〳〵屏風を倒ぶごと
く。主もり落〳〵も撲地と顛倒を。射〳〵落〳〵ぬ〳〵とぶ〳〵〳〵おの〳〵
弓矢を擲遺棄。太刀抜ぶ〳〵〳〵主もり落〳〵ぬ。吐嗟白縫撃ぶ〳〵べ〳〵ふ
え〳〵ふ。誰〳〵ハ〳〵ちぶ道次の藪蔭より。石を飛をの雹のごく
先よ〳〵〳〵軍兵ぶ人立地よ打倒さる。これおハ五騎十騎の半武者


観音まの
森ヤ



あれば。今助兵ものそひくるもの。そひくるもの四散して逃奔さり。白縫はその間に突る諸膝を踏あるは。逃るを逐んとすれども。とゞめ噛ども。はじうもく。蓑笠被る大男。藪蔭より走り出被る笠を脱捨て。ちり〳〵に成るを見て是八町礫紀平治なり。白縫はこは思ひいうけもとゞりに落る涙をうち拭しい。いうもや紀平治。ようも夫あの悪みく在りんの館を。菊池原田に攻られ。高間吉田あいさ〳〵なりうとが父も。さきの日あひめとおぼし。こがうへは後ようそいらめいもう誘ひとさきこは曹司の所為なりと仰られば。紀平治はうちくつん居て。はるゝ易くいとしいある十日の軍利あり。身方の軍兵大半討死ときいくるは曹司は薄痍も負給て。近江の〳〵へ落給ふとぞ。白河の山中に。如此くの仰を蒙り。已てをるまで其外あく別れ。

夜を日に繼て走下りしが。今霄城のうへに當り。遥に火光の焚ふ驚られ。あは逸て走るもそれ夫人には駕の歌に逐て出れ既小意くうえをへ。石を枕に仇を退け。悪るさに潮を汗せるやの悲しさ。身の僥倖ありと一五一十を述了へ白縫は寄朝の軒に落伸まひしく。少し安堵。うれしさうに曹司あへるのはこの世ふ年一なる。清るひあるこが身より。健氣なるは野風。いと惜きは八代ごとありしく。この身彼こを語り出漫に落涙あり。紀平治も瞼をあがこと。山雄といひ野風といひ主よかりく死せるの。過世いうの契のありんこれを思へば去年の夏こが君上洛。ふ時。野風が拒よかふ。もかくべしとの前象。そは引くえ紀平治は今霄の合戦あさく後れ。只面をも忘れ。八代が敵を拉く。潔く討死せ

のこゝろ少しも忘れしらず。いひつ敵の捨てうる。松明の焼さゝを捨ひと
すくう照らし妻の死骸を引起せば吭より項まで。筑中うて射
徹さる血に塗れつゝまよりて。太刀の刃こゝる虧まで。鋸に異なふ
ねいさとそまいく戦ひつゝめと。もりへいえまば白縫も共に歎きの数を
ひぬかく紀平治が袮の枯枝を伐おとし。死骸の上に積うけく。薫火
をさしつけつ。南無と念ずる声とそもに忽地焚と燃こうつり烟となり
ゝゝちのぶれ。再び敵の逐手ぬ間ふ。誘ふへといそぐ立。主従浦曲を投
て走りうゝに。東雲ちくなりゆくこゝ。敵に押隔られる女使ども此
首彼首よりえりあつ。有斯バいよ〳〵怪しあらんずとて。こゝなつぐ
折姿ようれ結ひ。首ふくく打載く。ゆく〳〵ゝ踏も忘ぬ火の紅紫を其
日船出しく。四國のうく糟せり。

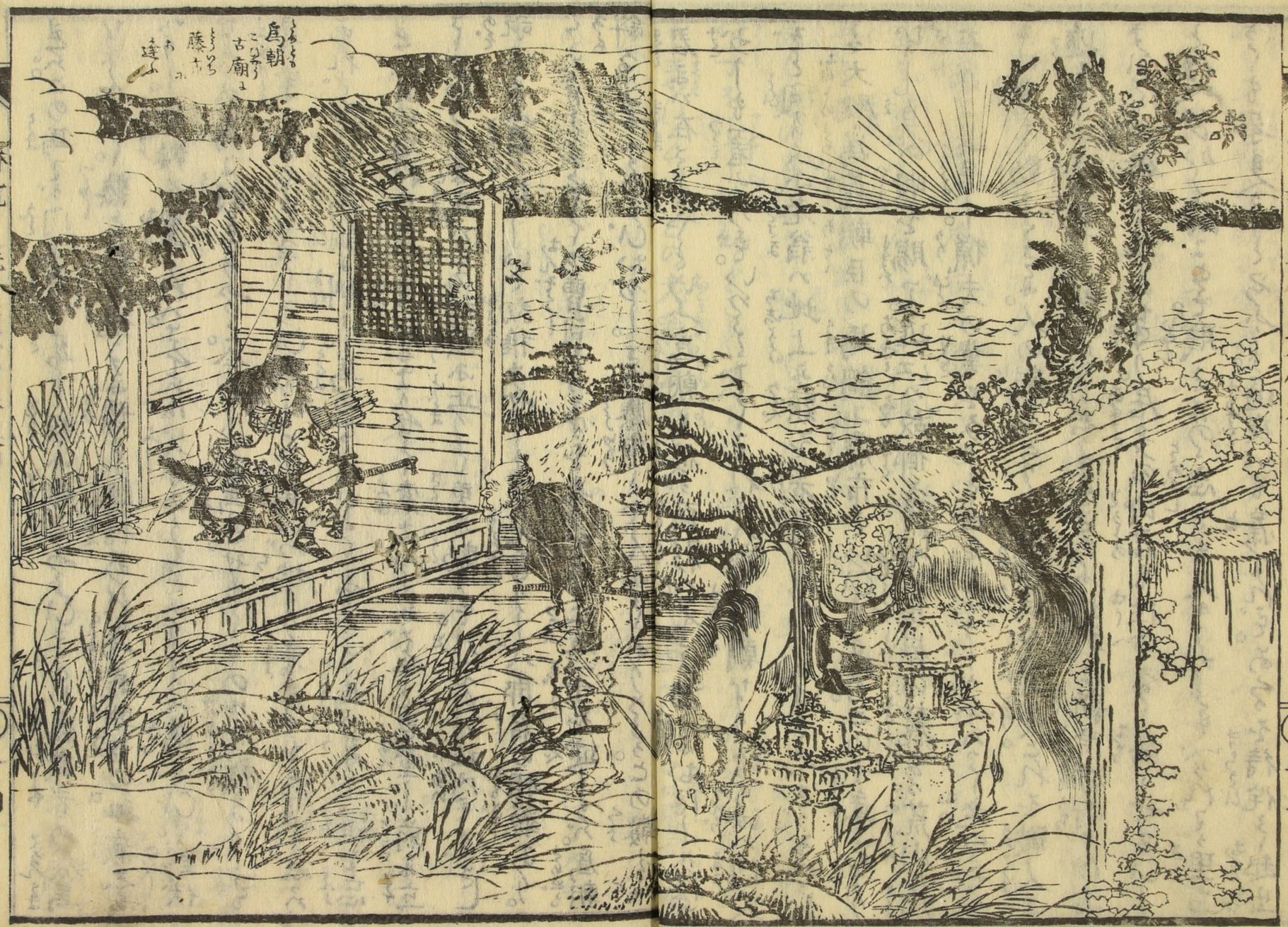
第十回

藤市馬を認く北濱に到る　鳥朝單騎江刑に走る

有左程に鳥朝は白川の山中ゆく。紀平治を紅紫〳〵ゝ身
もさしく。繋ぎぬ松のさゞ波や滋賀の都を後方ゆく湖水を北へ
落ふ頃しも七月十日のゆふべ。昼は暑ふ堪ゆ。夕ゝ鳥れば
鶉鳴く。真野の入江もうちつゝ尾花浪ふる秋風に衣吹さ〳〵
も中濱のうゝ越く。北濱のゝ来ふゝゝ夜もさゝ以と
く深ゆく。とても借ゆき宿もあよぬふ樹の下岩の挾間ゆりと
雲時想ひぐやとおぼしゝゝ路の傍ふゝゝ神社のありしゝ
馬より下りく社壇に尻ゆ。馬に對〳〵宮ゆ。さても汝と
ゝのゝ新院ゝの戦に勝ゝ。父もゝれも駿の所領を賜りく。

汝も又王鞍金勒に榮花をきはめてあるに。かく落人を寄せありしかく。
ここに拘らくなどか今ハ身の暇をもらひまゐらせ。いづ地へもさすらひてゆ。
よき主を求よと仰て。持たる弓をとり出して賢のあまりを打うえ
ば馬ハ忽地身ぶるひし。北の濱方へ駛去ける。かくて為朝ハ社内に勤居
て。父の行方なる同胞のうへ宰府に残せし妻子の身のうへ何くれとなく思ひ
けるほどに。いつより廣前に額づきて。ひたすらに祈念なしければ。轡ちる音の
聞えて。蛍も誰魂ならんと怪しまれ。磯うつ浪や岩松に風ハ敵の来るかと
耳を側だてて。まどろみもせぬ夢に夜も明ゆく頃しも。あれ外面に
高く鑣の音きこえり。怪しやこの馬の奴ぞ。うち立ちて窓よりうかがふ。
格子を少し押ひらきて見れば。年紀六十あまりの老翁彼馬を牽
て来りぬ。この老翁為朝をつくづくと見て。君ハ筑紫の御曹司八郎

君にハ在さずや。といふに為朝も彼が面影ハ見るやうにおぼしけれど
少しも一遍のおもいで。いかにとぞくこれハ八郎為朝なり。そも汝ハ何人
ぞと問ふに。老翁ハ地上に頭を著。君ハ知ろしめさずやさぞそれがし
ハ大殿為義朝臣の馬飼に藤市といひしものとの十年あまり
むかし。身の暇を賜て。近江ハ故郷なれバ。比良嶽の麓なる荒川の北
在家に退居し。猟夫の業をまなびて世をわたりしが。今ハ老くちて
その業を勤がたさに。人の射たる獣の皮を買受これを鞍人に
遁与して活業と致てあり。さるにこの亂れ戦に新院方打まけ給
ひて。大殿をはじめなまり居多の郎君も往方なく落うせ給ひし
と傳へ聞。かかる時にこそ賤きものの志をも見せまゐらすべけれ。されば里ち
かくも身を人がしとぞおもふ通夜いも寝られざれ。あけるを待侘て起出


為朝
こがうの
古廟
藤ち
おの
達ふ

まべとの馬こそ門に走り来て頻に嘶さけびしと云。落武者の放馬なるべし。熟これを視るに豫て認得ある為義朝臣の秘蔵したり。唐鞍を置かれば。これは父子のうちこのほとりへ落ゆかれし。野伏なんどの為に討れ給ひしと。今さらに驚きせめて其の亡骸なりとも尋求むべくも思ひしかど。その馬いづ地より来りしを知らず。あれども。いかにし馬飼に馴れし。馬のことなれば。よく知りたり。馬は来し道を忘れぬものなれば。これが歩むに任せて索ねゆかばやと思量し。前に立たせけるに。馬はとある社頭に止りて更に動かず。只これは社内よりさし覗きまつる君は。むかし幼稚にましまししを。八郎君の相貌あり。これぞまことにや。御曹司なるをしりてゆく。一五一十を述しかば。為朝斜ならず喜びたまひし。また藤市とよんで。ふかくありけること此の駿馬を

度合戦の料にせよとて。父の賜ひたりけるにも不意も汝が目標となりめしも主従の縁につきざりけるべしと宣ひて。為義朝臣の往方をしれざるとて。汝まく馬を放遣りしかども説示しけるを。藤市は或は悲み或は歎ち泣て。まかく我が家に潜ませまるにせんといふ。その志に愛でても。卸て主さまに似たりとさふべし。汝が家によりて。鶏に父の往方をも索ねかしてけり。さるにても此の馬の汝を導きしこそ怪しけれ。こは全く神明の冥助によれるなり。この社は何の神を祭りなるらんと宣ひつ。明けくまふち仰ぎ見給へば。八幡宮の三字を写したる額あり。誠に氏の御神の御導きまするの疑ひなしと。馬をば直に進らせべしと。みくしさ廟祝さんなしとて。神祠に清め物を進らせんもよし。これをば男山へ献らんと宣ひしが。四五日のち藤市

はこの馬を牽て八幡へまいり。鞍置たるまゝ彼神社に進らせ潜に主君の武運を祈念しけり。次の日荒川へかへりけるとぞ。

第十一回

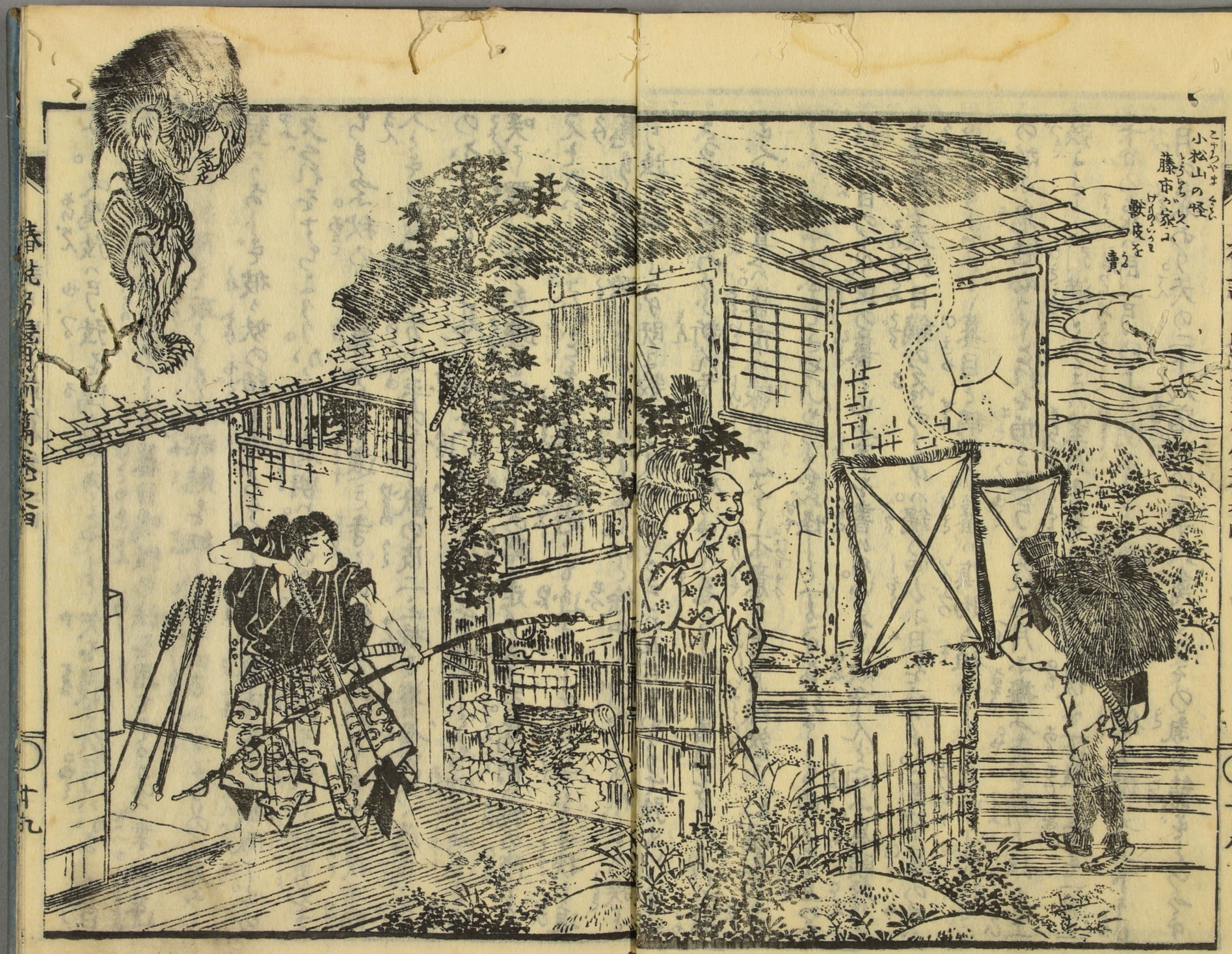
楊梅瀑布に御曹司山猱を殺
石山温泉に武藤太舊主を賣

爲朝は藤市が誠忠を感じおぼし。その日誘引れて荒川に到て見給へり。此ところ山ふところにして。世を潜に究竟の地なればとて。親同胞の往方を聞定め。聚會ことぞ。ゆるびて事を謀られと議しまゐらすに藤市そ妻もなくして。身ひとつの氣やすさ。生活の間あるなりし。大津坂本の外とりに出て世の風声を聞んとしつゝも。楚と定めかぬることもいと多かり。已にして七月の下旬に及て。有一日中濱へいでて出かけしより後もなし。忙しく走りかへりて。爲朝のほとりに進りまいらせ。今度大殿の御往方を聞定めんと思ひしも。あへなく涙を潜然と落しければ。爲朝うち驚きて。あはれ父は捕られ給ひつると問給へども。なほ一種へ回答けるは。させる事は聞得て候。中旬を卸せたまひしに。さても人のうへをせまりぬる日軍敗れし時。左府頼長公は流矢に項の骨を射させて薨給ひ。新院は爲朝我朝臣をはじめとして。光弘季能なんど。僅五七騎に供奉せられ。如意山に入せ給ひ。こゝにて人には暇をたまはり。光弘季能のみを召倶して。知足院の邊なる。あやしの僧房に入御ありて御髪をおろしたまひしかど。終に探し出されたまひて。讃岐國松山へ遷させ給ひぬ。又爲義朝臣は。五人の公子達とともに東國へ下向あらんと議しける時。俄頃に病著ふして。そのまゝ得つかで。今はとて思ひをこえ。墨の衣に容儀を變て。嫡男義朝の館へ赴き給ひ。頼賢頼仲。爲宗爲成爲仲との五人の公子達も。

勢力竭て搦捕られん。こゝを義朝が預下しまゐらせ。とふ少納言入道信西
も。爲義は父子を害せん爲清盛と示し合せ。その叔父なりける平馬助
忠正。これも新院へ召れしが降人とありしを。清盛らけまりて首を
刎てそのころ清盛既に君の爲ふ叔父を誅せり。義朝も又父を討よと
いひん爲しこれハ義朝と仰せられ父爲義法師以下五人の兄弟を誅
せしめ及び。義朝ふかく推辭申ける大殿をくじ
やまゐらせ。は兄弟三人船岡山にて首を刎られ剰へ幼稚五歳の一人
の男子をも討せ給ひつ母君ハ八幡詣の人さゝとのゝ乞ひ食く。悲歎
あるこなりけん。五條柱川へ投入給へ。といふ語も果ぬるに爲朝涙泉
のごとく。悲さうな父母兄弟三人の黄泉の客となりぬるに爲朝ハ
存命なるハ。父の仇ハ兄義朝に向ひ奉れ二條河原の一戰に
矢ふ射べきりしを。後君の爲しとて。兄を討んハ獣よりもとて
ハ。兜の星を射削りて走せ去りぬ。かゝるのありとて一つハ胸さゝ射
徹しくくれんもりの。今ハいかに悔もひなし。直ふ洛よ潛上り。義朝信西
が首を操切て踏碎さ。刃のほゝえ祖切死ぬべきいきをくれ。お社へ
ぐふ元元の人ハ藤市ハ前ふ携て後方ふ
ふ。やその人を擊まつも。いとをりの孝養となるべき。只永く亡跡を
吊まつれこそ。とるゝ勝ぐれるこさまを。くよ諫こゝらくいよ〳〵ふく潛せ
まつらせ給ふ。爲朝つゝ。もぼ〳〵ふ。これ紅紫よりあり〳〵ふ。既ふ九箇
國の民の心を得ぬ。とく宰府ふ下ふく再び九州を切從へ新院を竊
出まつるせく。事作なりぬ。これ日本國の摠追補使とるゝ。
謄太くも心を奪ふ。宰府の形勢を伺せまつふ城をば菊池原田ふ攻

られて。男忠國を討ん。白縫も燒死んと。ほえ猛ふ。憤りふ
迫るが。人ふ〳〵肝をく。鳥ふ〳〵翼をさゞめく。既ふ左右の佐をし
るひて。速に成ぬるを成ぬるが。又徒ふ日を過ぬ。志ふ
このこゝろ藤市ハ家へ夕べを毎に獸の皮をかく〳〵賣る。五十あまりの
男あり。これが來る毎に爲朝の弓弦をのづから斷かば。ふく怪こと有
日藤市ふ志ゐ〳〵のおもゝ〳〵。彼男いづ北のかのそと問へハ藤市
答へて。それがしも楚とふ志ねども。北方なる小松山のふとりに住むよし。
彼こゝ〳〵いへり。件の男この春のころより皮をかく〳〵賣ふ。よ
く獸を取ふん。皮ふ鏃の痕もなし。今〳〵疵なき皮なれば。その價を
よろこばれど。敢價を論ずんもせず。ときどきかりとるまゝ。鈔を切
ゝ〳〵ふ。爲朝ハ怪物なる。彼が孫なるはふとが

弓弦の斷るゝ。既に數回に及べり。ゆゑに弓ハ五石にあまりて強もいと太や
うなれば。おのづから斷んやうなれ。かゝるこゝ〳〵ふ蟇目をりてこれを試
ばゝと宣へば。藤市ハ緣由を伺ゝ。不意も毛骨竦然ゝもぼえる。且
〳〵いふ。今ちさきひぐ〳〵もあれば怪〳〵とするもあれども。宜つも
彼引目のゝ。虫の蟇といふ字を書のへいふる故。やんと問ふ。爲朝答へて
まうす。夫引目鏑の名あるゝハ鏑の四方ふ目をゝり。と是を蟇の目ふ
象るこゝをゝり〳〵蟇目と稱せり。蟇ハ陰物の祖ふ〳〵月中ふ胎托こと
の故ふ鬼魅ゝ〳〵これを怕る。且弓ハこれを月ふ擬ふ矢を刺ゝ上
弦ゝ〳〵人引滿るゝ〳〵さハ望月ふ象り。發つの後を下弦ふ表ゝ。一月三
十日の象ハ即一弓の上ふ明ふ〳〵。表裏陰陽の德を備又上下ゝ日
月の象あり。天の二十八宿地の三十六禽ゝ〳〵その氣を籠ゝ〳〵


小松山の怪
藤市が家に獣皮を賣る

ゐ。又鳴弦ハ弓弦を鳴らすのみにして矢を發さず。弓ハかゝるを白木を用ゐ男子生まれしき蟇目鳴弦の法を用てするのハ素弧蓬矢の純陽を取て邪魅を征し志を四方ゐ示すものなり。よく翌ハうるゝぞ彼ら妖の徒をあらはすべしと宜へハ藤市ふゝ感佩して夕べをまちよりかゝる鳥朝ハ次の日蟇目の法を設て彼男をまちもゐる。秋の日れ暮やすく遠き寺の鐘おとづれて日も山挾ゐ向入ときゝて件の男生平のごゝ獣の皮二三枚を脊負ひつゝ藤市ゞ家のかたうちゝゝ来て既ゐ門ゐ入ゝんとしてあぐゝうち仰ぎ呵ゝと冷咲ゝ裡へハ入ゝも踵を回ゝ蒼の路へ走り去りを鳥朝ハ物の隙よりうかゝへてゐゝ。さればこそ妖怪なれ逃ゝも逃さじとて弓矢をすゝ挾ゝ追駕ゐゐ彼ハ騒ぎまどゐまゐもゐ。こゝ徐やゝ引あんどゐその疾こと馬の馳ごとく。いま追ゐくゐ間ちゝも追つれゐ。比良の峯方も打こゝ南小松と北小松の間ゐ。楊梅の瀑布のほとりゐ。忽地彼男をうゝしゐハ朽をゝ。遠くも隔らゐ。いづ地ゐ才を隠ゝん彼が栖ハ正ゝくこのあゝなりとおぼゝ彼此をうかゝゐ瀑布の左ゐ。そこゝ坦地ありゝ。あゝゐ榎の枝葉生茂れるあり。彼ゝこの樹蔭ゐゝよ躲ゐ居ゐゐりやゝゝ。茅萱踏ゐ入りゐ。猛然として彼男榎のゐ人ゐ立あゝれ半弓弯設ゝ拝と發つ矢過て曹司の面上ゐ飛ゝ来ゐ。才を背ゝ避ゐ。矢ハ鵐ゐ下と立を立セもおゐ。撰捨彼ハ矢ゐ。ゐゐ大ゐ慌二の矢を刺んとすゐところを鳥朝ゐ引ゝ射ゐ人ハ鳩尾骨碎ゝくゐと射徹ゝ。鏃あゝうゝ榎の幹へ一鏗抗て縫ゐゐ。それと彼ゐ頭ゐも死ゐ。ゐ足を悶掻ゝ脱ゐんとゐ。鳥

朝これをこんまびく。弓矢こゝに戛離と投捨太刀抜揮頭ゝ走りかゝり。首を磯と切まくぶ。俄頃ふ山鳴り瀑布浮騰。風又颯と吹て木の葉を飛砂を巻揚四方晦然とくらぐらゝ物の善悪もとゞこの時しも藤市ハ此曲司のゝ乞りとゝりれ。蕉火ふりてゝしゝその迹を慕来つゝ風おさまりゝ後走り著。この光景をゝゝ驚さつゝ。まづその故を問ふ爲朝ハ今この妖怪を射ゝめる首尾を説示しのふ藤市これをけて。おそゝ蕉火をちゝくあげゝ。ゝもよゝくゝ見へ五十ばりの男ともゝしゝ。身丈一丈ばかりの獣ゝ。針のごとき毛斑ゝ生出ゝ足ハ漆を塗るやうふ黒くゝ。爪の長二寸ふ及べり。首ハ遠ふ飛ゝ。右まゝる鹿角ふ噬著ゝるゞ。その面粗ふ似ゝ粗ふ異あり。頭の毛ハ雪のごゝ白くゝ。長二三尺もあるゝ。脣厚くゝ鼻を掩い口ハ方ふ裂ゝ。尖き牙のり。既ふ死ゝ。くゝ眼を閉ふ。瞳の光人を射ゝ。さゝゝふ生るゝ如し。爲朝よゝくゝ見とりて。これハ何といふ獣ぞゝと問まくへハ。藤市答ゝ。それゝ山猫ふ影の年月を経ゝ。いまゝ。かゝる獣をゝそこハ世ふいふ山猫ゝ。実有なゝふこそ。彼ゝ栖をゝ究めゝ宜しゝ。藤市ともふ。榎の背ふ到ゝゝ見るふ。果しゝ一ツの洞ありゝ。その廣輙くゝ人を容べし。ゆゑて裡ふ入りて見ゝ。ふゝとゝゝ七八尺ふ及ぶゝ。裡ふハ獣の骨を堆高く積置。又錆ゝ錢居多ありゝ。土ふ著くゝ朽爛るゝもおほし。便藤市ふ仰せゝ錢ゝハ外面へ運び出させゝ宜しゝ。この妖怪毎日ふ獣を射ゝ。肉ハおのゝ食とゝ。皮ゝハ汝ゝ家ふ持ゝ帰しゝ。鬱ゝるゝのゝ。その皮ふ鏃の斑なりしゝ。彼ゝ眼ふ射當るゝ。向ふ彼ゝ射つる矢のゝ面上ふ飛来めるゝ。ゝちゝ一尋常のゝのゝ。忽地眼を射らるべし。そも

楊梅瀑布ホ
怪を斬て
銭を得

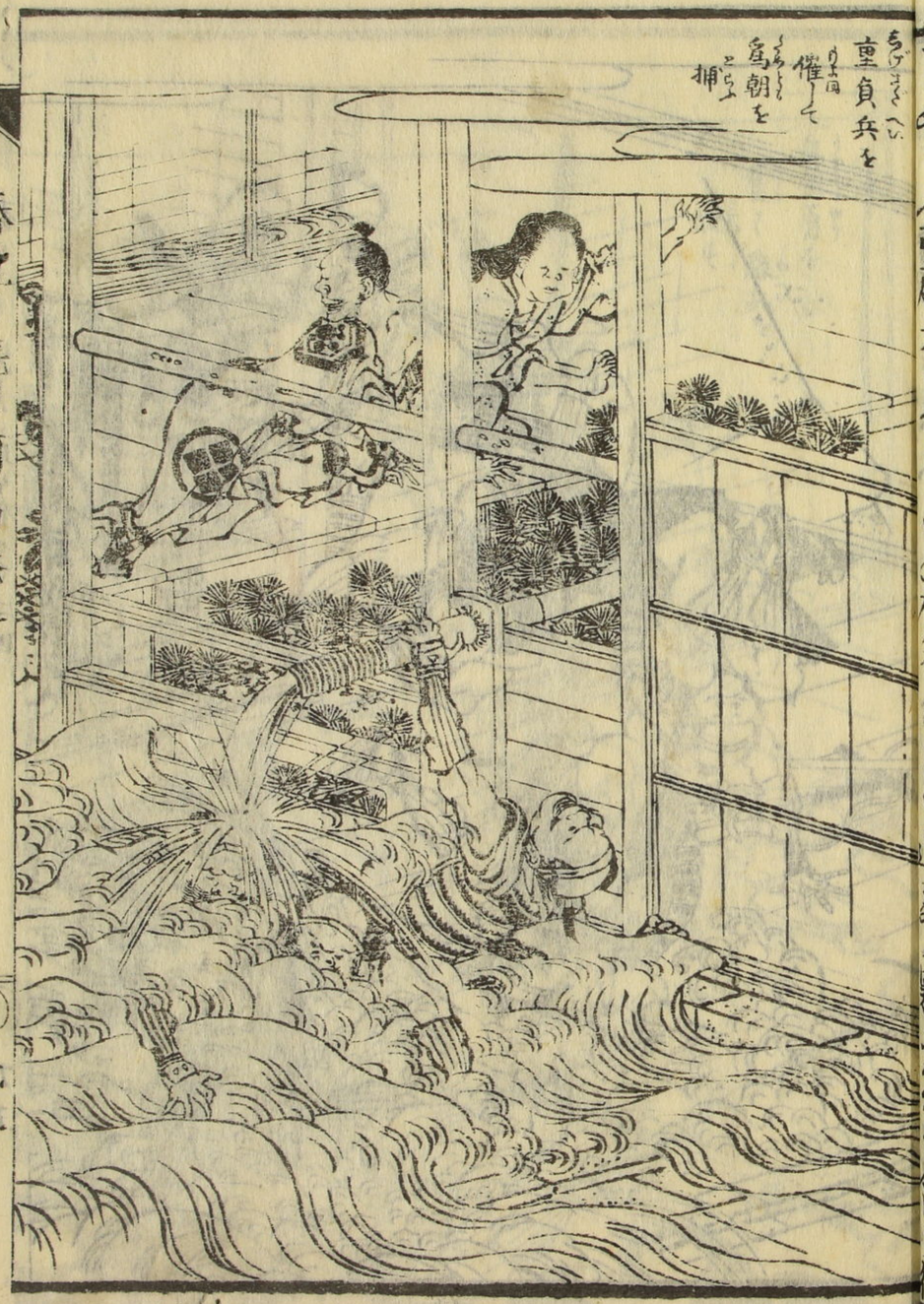
何をかくす弓矢になしつべしと宣ふにぞ。藤市も仰首てしばし回答て
その弓矢を拾ひとりて見せ奉るに。その弓は黄櫨の幹に竹を合せ藤
蔓を巻て作れり。矢は又獣の骨を削るものとおぼしきが。これは皆焼捨よ
と仰すれば。藤市これをも携て山操が首をもひとつに寄せ。柴折くべて是
を焼捨。軀の皮を剥とりて銭を裹み藤蔓もて楚と脊負こはこゝろえぬことも
うけたまはり得つべきかと。うち笑へば御曹司も咲坪に入りたまひ。このわ人にまふさ
ざらんにぞ。我この妖怪を輙く殺せりと伝へなば。あやしむもの怪しみて才の
大事に及びなんあなかしこ秘すべしと宣へば。藤市げにと點頭て。其ふ
家路に赴きけり。さる程に為朝の矢瘡その夜俄頃に痛いでゝ。いとも堪が
たく見えたまへば。藤市うち驚きて瘡口を洗ひ毒を去りて。膏薬を貼附
なかにせしかども。速には愈べくもあらざれば。かゝる金瘡には。この山の奥なる

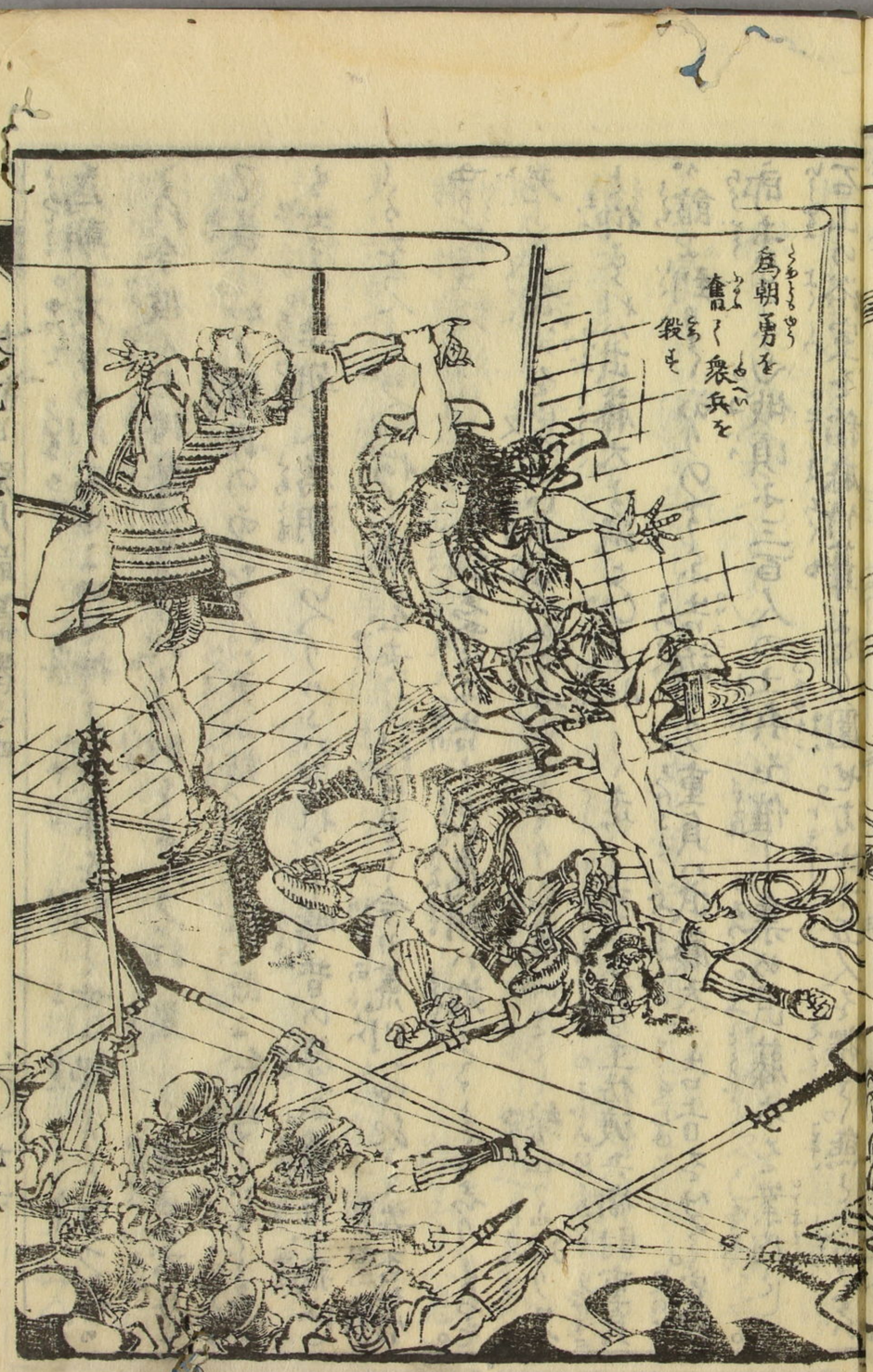
温泉に入りたまひて日あらずして平愈あらんと。藤市がすゝめまうせしかば。おとゝ
もべ彼処に赴きて保養せんとぞ宣ひける。こゝに又藤市が甥に武藤太と
いふものありけり。彼幼稚して父母を喪しかば。藤市養ひとりてこれをそだて。民
田の浦なる豪家に使はしけり。小厮となしおきつるに。この三年ばかり前
に賎主人の銭を盗みてこれを淫酒の為に用盡せしを。事發覚て主人太
く怒りて武藤太を直に藤市が家に領来て。速に彼銭を返し納よと責
ぬ。しかれども等閑に閣ば。官府に告訴すとて迫りけり。武藤太はさらにすべなかり
藤市なりかはりてつぐのひえせてんといひて。藤市これを迷惑し。しかじかしてその債
を償ひ。武藤太をば勘當して忽地に追ひ出しけり。かくて武藤太は京
浪速を徘徊し。あしき友のまじらひ交参て賭をこのみ酒を嗜て。あるときは
あるにまかせて明日の貯をなすことなく。なきときはさらにすまずに物を借りて返

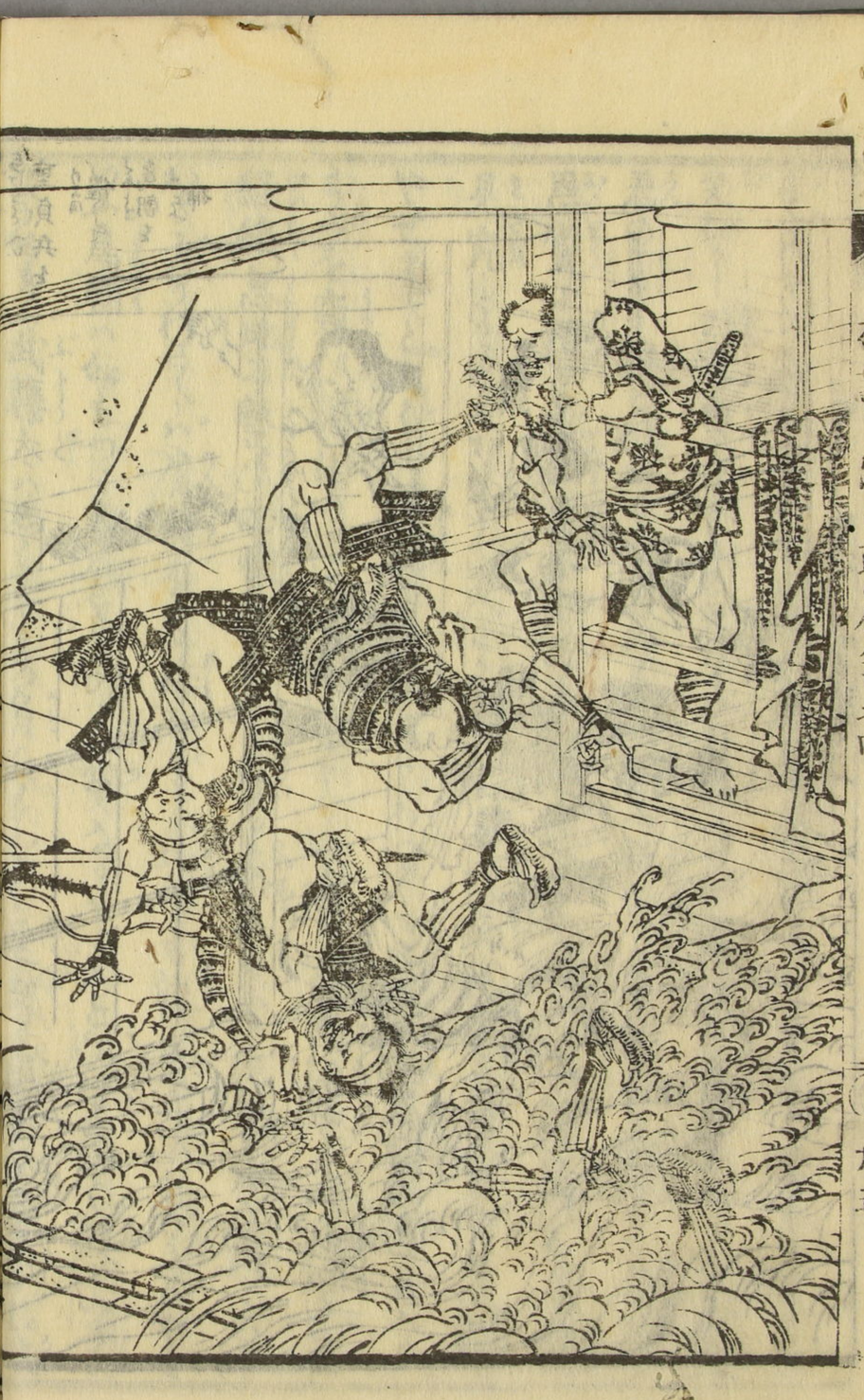
さるのみにて世をすぎまゝに渡りしに近来ちつぢまりて賭に負さすに邪
智も用る知るかりなん阿容ことに荒川へ立入てうらうをぶふ〳〵匿〳〵
只顧先非を悔るおりしも村長るをしをの〳〵藤市に陪話しける
藤市もそのの極はさしふうけ引ざりしつゝとおりやう。されば老
〳〵児といふりのもあとざるふりとのまゝふく世を辞らず誰うゑよく
後のつなどをも経営るをさるに甥志を更移ふ子てい大なる幸なり。加
旗は曹司の湯治志をりんに彼を召俱〳〵ゆをさのでようるの便よるべと
深念〳〵陪話らるゝ者ぐ〳〵ふ〳〵遂に勘當を許ふ。ふ向後を誡
るその衙へ所をえるふ旦は朝まどをよ起る夜は子四ころまぐ〳〵寝
もいと真実やふ動半ゝ藤市や安堵るまづ烏朝おもおりふ紙を
出まるとを有日武藤太よりるる近曾るる家に在るるるるる

るるる〳〵時ふる〳〵恩恵を蒙るる人の子なり此度所用あり〳〵加賀國
へとく下りまゝ折しも俄頃ふ路よ病るるる家よ立るり。もと〳〵保養し
まつるるより〳〵石山の奥る温泉よ入りのでよるるるべ〳〵ゆるもれ
へ生活よ遑るる〳〵従ひゆるゆかるのでゆ汝れふるり〳〵彼処ふ赴をよく
ゑを用り〳〵勅りまるるせよとゝくば武藤太一議みも及ばぬまるべし
といふこの時烏朝の矢痍をこ〳〵おとるり。歩行もゆ自在ありしぞ。
次の日武藤太を将る〳〵石山へ赴を。七日ばり湯治るるゆ全く
愈をとゝくるも湯もゆ相應せりと人四。武藤太へとるふ到アるるを
るる信る〳〵勅り進るせる。竊よおりふゆるれ洛よありしるる世
の風声をるる〳〵ふ鎮西八郎烏朝を捕る生をるのへ忠賞抜群る
べとゝるり。これ彼人の摸様をえるふ身丈へ七尺ふるる。面魂凡人

さて又そのころをところを又ふ農業商賣ふとてみぐ疎—且こが叔父むう—恩を禀ける人の児なりと稱—これ以管待ちるのこまぐ主君のごと—彼これおりてよこの人烏朝ふ疑ゑ—。これ今告訴—過分の恩賞ふ預らば福貴ところのまこのふんとふ—ふ絡こびゑびぐ。楚見究—ゑるもなく—。人とぐ人せば毛を吹疵以求ゑるゑり。とやせばかやせまぐと。ちぐ—躊躇—ぐ佶ところつくゑるのありて。烏朝の湯ふ入りまつを窺ひ湯折のまこうふいまくいふ。九湯浴ちる人按摩ほ—て経絡忽地ふ整ひ叨驗速ゑりと笑て浴ちまふ以ぐ出ゑるほよろ—かゑるゑりれ。さ—ば肩癖をも捶ゑぐし—。垢をも流—ゑ—ちぐうりやとい—ふ烏朝ハ心もつこころでそのまふ驚ゑるとよろとハ笑えく。彼がいふまうせまふ武藤太ハちぐ—その肩をりこく退却て竊ふ矢を合ふ彼




爲朝勇を奮ひ襲兵を殺す



爲朝。左手の肘右手に四寸伸く。矢束を引と世に起らんと笑つ程に。
れ今彼人を按摩するに。その時をよくうれば果して左手は右手より
長しかゝる證据のあるなれば更に疑ふべうもなし。既に公は涙ぐましく色が
も出さで詰朝又爲朝ふいくりはるれば。それぞれ疇昔の夢ふ藤市ら病に
しうをつくづくと公はのたまへり。公安うしばよりて今日荒川へ行て安否を尋
ねうて立ちかへりて誠をやうみ告しうば爲朝は泣くくもあり。
老たる養父を家ふ置はさはりふ成ぬとも疾ひきくゝ緩やうふ成りぬ人
と仰されば武藤太よろこびて小ゝしく走り去て直ふ領主佐渡六衛尉重貞
が館ふ到りてありのまゝふ告訴りう。重貞は武藤太が告白を聞て家隷
郎あはせて俄頃ふ三百人の土兵を催し集め。武藤太を案内として。
石山の浴室を稲麻竹葦よりも圍せ。力士十五人を擇て熊と太刀を
持せてまづ武藤太をもふ潛よりこゝ入せけるこの折しも爲朝は浴し
て在せしう武藤太つとまいりて只今人とゝ入は爲朝はいとしの好ぎやう
郎と宣ひて湯を出んとしまふ十人ふ組て特に来あふ爲朝
佶と又ひとくさろりといひもあへず。二人を搔繩吭締て捨ぬ。殘る
七人左右より矢庭ふ組んと闘を忽地二人を下と蹴殺し又近よるを湯
折ふ押當首ふつと捻切捨或は拳にて打倒し足ふかけて踏ころし一息吻
て立ぬ人は血は流れて温泉を染屍横りて累々たり爲朝は既に武藤太
ら告訴をきつるを聞ぬ人はもとより憤ふ堪ずそれを賣りて栄利を走る其
愚者迦も迦さしいさまを見て走りうらんと思ふ武藤太大ふ怕て
浴室紙梵と鎖し彼甚勇力あり。くもく火を放て燒殺すべと叫ばれど
爲朝奮然として浴室を打破り柱一本ろうげよ引拔武藤太を打拗んとて

追蒐ゑを待設るる重貞が家隷ども蒐隔くこれ組に出んと競ふる。
爲朝ひとりも走まわりて彼柱をあり打殺し敲伏縱横に奮ふ
働きのひめ矢疲いたく愈ぶ〳〵合期ゐふざる時節ゐまで去
ぶ〳〵ことありれ。やや〳〵臂よりり。勢力究り〳〵不意撲地と倒まと
まへ駿の捕夫走り寄是れ取つき個〳〵いやうく〳〵打累るもの尾
臥つも打退蹴返し〳〵ひしと五指のうろ〳〵彈んより。一拳に志も
小ハ大ふ歔〳〵ぶれハ終に生拘れるぞうとて〳〵抑この日爲朝一
人を搦捕らんとて打殺さるるりの三十餘人傷つくその五六十人に及び
さい〳〵湯治の爲として居あらせる老幼男女ハ駭き怕まく逃まどひ踏
ふされ壓ふされて生死をもつぶて。重貞ハ爲朝を搦捕るふ〳〵に堀
こびかぶて内裏へ引ふまいりれハ彼ハ音ふゆるりのなり。數覽あ
ぶ〳〵て周防判官季能これを受とりて。白さ水干袴に赤絹惟子烏
被せ髻に白擂をさ〳〵せり。主上後白河院ハ北陣ゐ〳〵數覽あるる。公卿殿上
人ハさ〳〵ありこれをくるりの駭然として舌を巻實どの爲朝を凡人
ふあ〳〵ぞ身丈の高ゆうなる。筋骨の逞しげる。ちも重瞳ふしてまぶ國
の項王ともいぶべ。この人り矢疲に惱れ折ゐふぞハ縱千万騎ぞいふ
ふも。輙く搦らぶるもおぼえぞ。さぶやさあしめまと。為朝ハまこーも
臆せる寄さるく。自若と〳〵おいーるる。これハ重貞ハ此度の功ふりて。
左衛門尉に補せられこよりと面目をほどこせり。

椿説弓張月前篇巻之四畢